『太平記』における武士の「恩」

于　君

一　はじめに

『太平記』中の武士楠木正成は、戦前まで、後醍醐天皇に付き従った「忠臣」として学校教科書等で称揚されてきた。しかし、戦後になると、黒田俊雄を始めとする史学者や中世文学研究者たちによるさまざまな資料の検証により、「悪党」または「悪党的」な存在としての実態が明らかになった。[1] しかし、「忠臣」楠木正成像は、演劇や小説などを通じて、今もなお人々の脳裏に残存している。『太平記』を「忠義の物語」とする感覚も、まだ消え去ってはいないだろう。それは、戦前期の教育のゆえでもあるが、長い間にわたって世に流布してきた『太平記』という物語・テクストの中身そのものに由来するところも多い。では一体、「忠臣」という言葉に代表されるような武士のとらえ方、「忠」や「義」を始めとする概念による武士の理解は、どのように成立してきたのだろうか。論者はこうした問題意識から、日本における武士像の成立について、特に軍記物語の武士像について考えることを課題とし、[2]「名」「孝」「忠」「情」[3]といった言葉をたよりに、『平家物語』に描かれた武士像について考察してきた。[4]

本稿では、中世を代表するもう一つの軍記物語『太平記』[5]をとりあげ、その中に描き出された武士像の一端を明らかにすることを目的とする。言うまでもなく、両作品は取り扱う時代も異なれば編者も異なっており、それぞれが拠って立つ思想的基盤も異なっている。また、両作品は最初からテクストとして存在したわけではなく、たえざる「語り」[6]によって形成されてきたため、その中身を一義的に捉えることは困難である。[7] これらの点を踏まえつつ、武士の表象を、テクスト中の言葉をたよりにしつつ考えたい。[8]『太平記』中の武士

の記述には、これまでよく言及されてきた「忠」「義」だけではなく、「恩」または「恩」と関わる言葉（「御恩」「重恩」「武恩」等）が多出していることに気付かされる。[9] ではそれは、一体どのようなことを示しているのだろうか。

二　中世の武士と「恩」

まずは、『太平記』中の武士がこれまでいかに論じられて来たかについて触れておきたい。室町時代以降長い間にわたって、『太平記』は主として政治・軍学の書として受容された。また、正成・義貞らの叙述が、『大日本史』の南朝正統論を主張する絶好の史料として利用されてきたことも指摘されている。[10] 近代に入ってからも、南朝の後醍醐天皇とその忠臣たちの忠君愛国の物語として、特に南朝側の武士、楠木一族、児島高徳、新田義貞らが好んでとり上げられてきた。一方、足利尊氏らはもっぱら逆臣とされた。戦後『太平記』はそうした特定の史観を脱し、一つの史書、一つの文学として、自由に享受し研究されるようになり、歴史学領域においては、前にも触れたように、武士の実態に迫ろうと、「悪党的」な楠木正成の実像が明らかにされるに至った。また、『太平記』なくして南北朝動乱の時代は語れないとされ、[11] 南北朝の特徴を表す「婆娑羅（バサラ）」というキーワードを以て『太平記』中の武士（佐々木道誉、高師直・師泰兄弟、土岐頼遠、仁木義長ら）を捉える研究も目立ってきている。[12]

ところで、約五十年間の争乱を主題とする『太平記』は、楠木正成や足利尊氏らと朝廷との関係、固定的な君臣関係、南北朝関係を軸にした著名な武士たちの姿を描いているだけではない。そこには、もっと多様で生々しい、戦乱期の武士の姿が描き出されているのである。中世期の武士像を正確にとらえるためには、リーダー層に限らず、『太平記』中の多様な武士群像にも眼を向けることが必要であろう。

そこで、本稿では武士を描く場面に多出する「恩」と関わる多様な表現に注目したい。これまでの研究において、「恩」で武士を捉えた思想的言及はほとんどなされてこなかった。思想史において武士を論じる際には、「名」を惜しむことを武士の主要な精神の一つとする議論が多く、[13] 最近の笠谷和比古による研究も、武士道の内容をもっぱら、「忠（忠誠）」「義（節義）」「勇（剛勇）」「礼儀」などから説明するものであった。[14] これに対し、軍記物語における「恩」に着目したほとんど唯一と言っていい研究に、「恩」を武士階級の主従関係に基づいて成立した社会意識（主従関係意識）として捉えた桜井庄太郎の論がある。[15] 桜井は『平家物語』などの軍記物語や『沙石集』などの説話集、法令や記録などを材料に、「報恩」意識は当時すでに確固たる道徳規範であり、恩に報いない者は社会から強く批判されたと指摘している。[16] また、主従関係における従者の「報恩」

が、武士のモラルとして結実したことを論じている。[17]

桜井が論証したように、「恩」（施恩、報恩）は、重要な社会的規範として、特に武士社会において重要視されることとなったのだが、「恩」概念そのもの自体は、古くから日本に存在してきた。ただそれが、より強く意識されはじめたのは中世になってからである。山折哲雄は、日本における「恩」概念の受容とその変容を概説し、中世において恩について二つの考え方があったと主張する。そして、「一つは親鸞や道元などの場合で、父母の恩や国王の礼拝を否定して、如来や衆生の恩を強調する宗教的な考え方である。もう一つは封建社会の主従関係に見られるもので、主君の恩と従者の奉仕（忠誠）が一種の契約関係にもとづくとされた場合である。だが日本では前者の宗教的な恩の概念は発展せず、後者の上下の権力関係にもとづく恩がしだいに重視されるようになった」[18]と述べている。この「上下の権力関係にもとづく恩」が、主として中世期の武士における、「奉公」と対をなす「御恩」という概念である。これまで主として歴史学で論じられてきた「御恩と奉公」とは、保護と奉仕・服従との交換によって成立した支配関係のあり方を、主君が与える保護「御恩」（所領給与、所領安堵、裁判における保護、官位推挙などを指す）と、従者が行う奉仕・服従「奉公」（戦時における軍役、平時における大番役などの軍事警察的負担、造営役などの関東御公事とよばれる経済的負担などを指す）とをあわせて表現した語である。この主従関係は、本来主君と従者との間に直接的かつ個別的に成立したものであり、鎌倉初期の鎌倉殿と東国御家人との関係によくあてはまるものである。[19]

御恩と奉公の関係について、鎌倉初期においては、御家人の奉公が主たる要件であって、御恩は従であり、御家人の片務的忠誠奉仕が求められるものであった。[20]しかし鎌倉時代末期に入ると、幕府の滅亡を経て、さまざまなかたちの御恩・奉公の主従関係が生まれ、未成熟で隷属性の強いものから、室町時代の打算的・双務契約的な主従関係に変化していった。[21]そのため、奉公だけではなく、御恩も強く主張されるようになった。すなわち、御恩と奉公の関係も、時代の変遷により、さまざまな変容を遂げていったのである。『平家物語』と『太平記』が成立した年代は、まさにこうした武士階級の御恩と奉公の主従関係が成り立った時代、そして、それが戦国期に向けて変容してゆく過程と重なる。

では、中世の武士の物語において「恩」はいかに語られたのか。以下、『太平記』本文で武士の「恩」が語られる具体的な文脈に即して、一つ一つ検証していく。まず、先行する軍記物語『平家物語』における武士の「恩」について触れておきたい。

三　『平家物語』における武士の「恩」

『平家物語』においても、「恩」は、武士に限らず、公卿・社僧・

女人などさまざまな人間にかかわって表出されている。[22]このことは、桜井も論じたように、「恩」の意識が、当時の社会においてすでに一般的な道徳規範として存していたことを示す。『平家物語』で「恩」が最も象徴的に現れるのは、平重盛が父清盛を諫める場面である。

①まづ世に四恩候。天地の恩、国王の恩、父母の恩、衆生の恩、是なり。其なかに尤も重きは朝恩なり。普天のした、王地にあらずと云ふ事なし（中略）いはゆる重盛が無才愚闇の身をもッて、蓮府槐門の位にいたる。しかのみならず、国郡半は過ぎて、一門の所領となり、田園悉く、一家の進止たり。これ希代の朝恩にあらずや。今これらの莫太の御恩を思召し忘れて、みだりがはしく法皇を傾け奉らせ給はん事、天照大神、正八幡宮の神慮にも背き候ひなんず。[23]

②其故は重盛叙爵より、今大臣の大将にいたるまで、併しながら君の御恩ならずと云ふ事なし。其恩の重き事を思へば、千顆万顆の玉にもこえ、其恩の深き色を案ずれば、一入再入の紅にも猶過ぎたらん（中略）奉公の忠をいたさんとすれば、迷廬八万の頂より猶たかき、父の恩忽ちに忘れんとす。[24]

引用①で重盛は、仏教的意味での「四恩」を肯定した上で、なお最も重い「恩」は「朝恩」だと主張している。太政大臣まで昇った自らの官位、一門の広大な領地・荘園は、全て「朝恩」あってこそのものだとする。続く引用②においても、「君の御恩」の重く深き事を嘆く。「父の恩」も説かれるが、ここからは、「朝恩」「君の御恩」が重要視されたことがうかがわれる。

これらの「恩」について述べた後、重盛は、「痛ましき哉不孝の罪をのがれんと思へば、君の御ために既に不忠の逆臣となりぬべし。進退惟谷れり」（巻第二、烽火之沙汰）と、孝忠を両立させ難い立場に追いこまれたのである。そこでは、「朝恩」に報いる（＝報恩する）重盛の姿は特に主題となっていない。[25]つまり、ここでくりかえし語られた「朝恩」「君の御恩」は、法皇を拘束しようとする父を諫めるために重盛が引き出したことばなのである。まさに引用①の章段名「教訓状」が示すように、重盛が強く主張している「朝恩」「君の御恩」は、後白河院を幽閉しようとする父清盛の行動が天皇に対する不忠であることを教え諭す効果を持っており、教訓的な文脈上の「恩」以上のものではなかったと言える。[26]ここで、教訓的な文脈上の「恩」と論者が言うのは、自らの切実な行動規範としてよりも、他者に向かって「恩」の内容を語り、受けた「恩」に報いるべきことを主張し、あるいは相手の過ちを正すといった性格の「恩」のことである。すなわち、「恩」の実践やその具体相が必ずしも明示されない「恩」、観念的な意味合いの強い「恩」のことである。こうした教訓的な意味の「恩」の使用例は、ほぼ同時代

に成立した説話集『十訓抄』にも多く見出すことができる。[27]

これに対し、かつて受けた「恩」に報いた武士の例（「恩」の実践）は、『平家物語』中、源頼朝以外に見当たらない。源頼朝は「御かたをば全くおろかに思ひ参らせ候はず。只故池殿のわたらせ給ふとこそ存じ候へ。故尼御前の御恩を大納言殿に報じ奉らん」[28]と、かつて平治の乱で自分の命乞いをしてくれた故池殿（平頼盛の生母）の「御恩」に報じようと、頼盛を鎌倉に招く。頼朝はさらに、頼盛に荘園・私領・鞍置馬・染物などの物質的財産を与えただけでなく、大納言という名誉職を保たせもしたのである。この箇所には、たしかに実際に「報恩」する頼朝の姿が示されているが、前述した教訓的な文脈で強調される「恩」とは異なる、実際の「報恩」の記述は、『平家物語』中、ただこの一例だけなのである。

以上をまとめれば、『平家物語』においてすでに「恩」は多く登場していたが、その多くは、教訓的な文脈上で使われたものであり、具体的な武士の「報恩」行為が記されているのは、ごく限られた場面においてであった。これに対し、武士のリアルな生き死にに際して「恩」という言葉が多く登場するのが、『太平記』である。

四　『太平記』における武士の「恩」の多様性

約五十年間にわたる戦乱を題材とする『太平記』は、武士の死をくりかえし描き出している。激烈な武士の戦死を描く『太平記』の描写には、武士のいかなる姿が表出されているのだろうか。兵藤裕己は『平家物語』と対比させつつ、『太平記』が語る武士の戦死の多くが、実は、物語の情況的な展開そのものには無意味な（あるいは、直接つながらない）ことを指摘しながらも、その死が、武士個人の生き死にのレベルにおいて意味があったのだと論じている。[29]個人的な生き死にの意味とは、「恥を思」い、「名を惜し」み、「命を義路に軽んずる」ところに表出される、道義的な死という意味であると兵藤は述べる。

本稿も、こうした『太平記』を特徴づける戦の場面における武士に着目し、その生き死にの背景に示された武士の姿を探り出していくこととしたい。それは、『太平記』中の武士のあり方が、まさしく兵藤の語るように、生き死にの場面にこそ表出されているからであり、そこに当時の武士像が端的に示されていると論者も考えるからである。そうした観点からまず注目したいのは、討死と自害の場面である。この二つの場面において、「恩」がいかに語られるかについて考察する。

四―一　「討死」「自害」と「恩」

『太平記』中、武士が討死する場面で「恩」が語られるのは、例えば、

人見四郎入道恩阿と金沢武蔵守貞将である。まずは、人見四郎が討死する場面を見てみよう。赤坂合戦において、北条側が畿内・西国の反乱軍を鎮圧するために派遣した関東軍の人見四郎入道恩阿は、いち早く北条一門の滅亡を予見し、味方の本間九郎資頼に向かって次のように語る。

御方の軍勢、雲霞の如くなれば、敵の城を攻め落とさんずる事は疑ひなし。但し、事の様を案ずるに、関東天下の権を取つて、すでに七代に余れり。天満てるを欠く理り、遁るる所なし。その上、臣として君を流し奉りし積悪、豈にはたしてその身を滅ぼさざらんや。恩阿、不肖の身なりと云へども、武恩を蒙つて、齢すでに七十三になりぬ（中略）明日の合戦に先懸けして、一番に討死して、その名を末代に残さんと存ずるなり。[30]

引用文前段までは、幕府衰運の分析である。このような不利な情況の中に置かれたにも拘らず、人見は、武家（北条幕府）から長年受けた「武恩[31]」を語り、自らの取るべき行動として「討死」を決意する。覚悟通り討死した人見を、『太平記』は次のように記す。

「武蔵国の住人人見四郎入道恩阿、老年七十三にして、正慶元年二月二日、赤坂の城に向かひ、武恩を報ぜんために討死し畢んぬ」と書きたり。[32]

人見の討死は、「武恩を報ぜんため」のものとして評されている。さらに『太平記』は、「名は止まつて、青雲九天の上に高し」と、こうした報恩行為を、「名」を高める結果となると称賛する。

次に、金沢武蔵守貞将の場面。北条勢が鎌倉へと追いつめられていく中、北条側の金沢武蔵守貞将が、山内の合戦で七箇所まで傷を蒙って相模入道北条高時の前に帰ってくる。入道は感激し、彼を両探題職に任命する御教書を下した後の場面である。

貞将は、一家の滅亡、日の中をば過ぐさじと思はれけれども、多年の望み達しければ、今は冥途の思ひ出になりぬと悦びて、また戦場へ打つて出で給ひけるが、かの御教書の裏に、

我が百年の命を棄て
公が一日の恩を報ず

と大文字に書いて、これを鎧の引き合はせに収め、大勢の中へ懸け入つて、討死し給ひけるこそあはれなれ。[33]

長年望んできた探題職に任命する御教書を北条高時から与えられ、この「一日の恩（官位授受）」に報ぜんと、貞将は討死をとげる。わざわざ「我が百年の命を棄て　公が一日の恩を報ず」という

言葉を御教書の裏に書いたのは、自分の抱負（報恩のための討死）をあえて人に知らせるための配慮であろう。戦乱の時代の一つの死に様として、『太平記』の作者は共感を込めて貞将の討死を「あはれ」と評している。

以上の二例では、北条幕府から受けた長年の「武恩」であれ、名誉の職を賜った「一日の恩」であれ、「恩」を受けたことを強く意識し、その「恩」に報いるために討死した姿が描き出されている。『太平記』において、武士の生き死にの具体的場面で、「恩」の意識がいかに重要な要素としてあったかを見て取ることができよう。

一方、『太平記』には、武士が自害する場面も多く登場する。有名なのは、東勝寺における北条高時一門の自害である。「血は流れて、滑々たる洪河の如し。尸は満ちて、塁々たる郊原の如し」[34]と凄惨を極める場面が語られる。なぜ、これらの武士は北条高時に続いて自害したのか。「平家の門葉たる人々、その恩顧を蒙る族、僧俗男女を云はず、聞き伝へ聞き伝へ、泉下に恩を報ずる人々、その数を知らず」[35]とする『太平記』は、北条幕府の「恩」に対し、自害を以て死後の世界（泉下）で報いる武士の姿を語るのである。

では実際、一人の武士が自害する場面では、「恩」との関わりがいかに語られるのか。以下、北条仲時と塩飽忠頼が自害する場面を例にとろう。越後守北条仲時は、絶望的な状況におかれていることを悟り自害する前に、軍勢に向かって次のように語る。

「武運漸く傾いて、当家の滅亡近きにあるべしと見給ひながら、弓矢の名を重んじ、日来の好みを忘れずして、これまで付き纏はり給へる志、なかなか申すに及ばず。その報謝の思ひ深しと云へども、一家の運すでに尽きなば、何を以てかこれを報ずべき。今は、方々のために自害をして、生前の芳恩を死後に報ぜんと存ずるなり」[36]

そもそも、北条滅亡の運命を悟ったことが、仲時を自害へと導く大きな理由であった。しかし、「名」を重んじる武士は、軍勢が平素の親しい交わりを忘れずに今日まで付き従ってきたことを「生前の芳恩」とする。「今は、方々のために自害をして」と述べる北条仲時の言葉からは、その自害が、運命を悟った上での行動であると同時に、味方の軍勢（＝仲間）に「報恩」せんがためのものでもあったことが、ここでは示唆されている。

次に、塩飽忠頼自害の場面である。父である塩飽新左衛門入道聖円は北条幕府の滅亡を悟り、自害を決意する。しかし、養子の三郎忠頼には出家遁世という道を勧める。そう言われた忠頼が、逆に父を諫めて自害する場面は、次のように叙述されている。

「忠頼、公方の御恩を蒙らずと云へども、一家の生、皆武恩な

らずと云ふ事なし。その上、忠頼初めより釈門の身ならば、恩を捨て、無為に入る道も候ふべし。苟も武家の門葉にあつて、時の難を遁れんために入道出家の身となつて、天下の人に指を差され候はん事、何の面目あつてこれを聴き忍び候ふべき」と、申しも畢らず、袖の下より刀を抜いて、忍びやかに腹に突き立てて、畏まつたる体にて死ににけり。[37]

父の勧めを一蹴した忠頼は、前述の人見四郎同様、直接幕府（北条家）の「御恩」を蒙っておらずとも、一家がこれまで命をつないできたことはすべて「武恩」のおかげと、北条家から「恩」を蒙った自らの立場を主張する。それに続く彼の言葉からは、『平家物語』の維盛の出家に見られるような、[38]出家こそ真実の報恩とする仏教的な「報恩」の考え方が、武士たる忠頼にとって命を惜しむ恥ずべき行為と認識されていたことがうかがわれる。忠頼の自害は、北条執権側からの「恩」を強く意識したがゆえの決意であり、武士として「名」を保つための行為として描かれたのである。

運命を悟った武士が、仲間からの「生前の芳恩」を思って死後に「報恩」するために自害し、また、北条執権側からの「武恩」をふり返り、「名」をはずかしめないために自害する武士の姿を、上記の用例は描き出している。

四―二　武士の「変心」と「恩」

以上述べてきたように、激越な戦闘場面において、討死や自害のような、自ら死を選ぶ武士の姿が「恩」と関わって描かれる一方、『太平記』には、裏切り行為や敵側の武士の救助によって生き残る武士の姿も多く描き出されている。そうした場面においても、「恩」という言葉が登場する。裏切り、あるいは敵に助けられた武士の心、あるいは敵の情に動かされた武士の心の変化を、ここでは「変心」と定義した上で、「恩」との関わりについて見ておこう。

六波羅殿の命令により、山里にいる赤松勢を追い払おうとした幕府側の武士伊東大和次郎が変心する場面は、次のように語られている。

赤松筑前守、船坂山に支へて、宗徒の敵二十余人生け取りにけり。されども、赤松、これを誅せずして、情け深く相交はりける間、伊東大和次郎、その恩を感じて、忽ちに武家与力の志を変じて、官軍合体の思ひをなしければ、先づ己れが館の上、三石の山に城郭を構へ、やがて熊山へ取り懸かり、義兵を挙げたるに、備前の守護加治源太左衛門、一戦に利を失うて、児島を指して落ちて行く。[39]

赤松が伊東を討たなかったのは、自分に協力させて京都と西国との通路を断たせるための懐柔策であっただろう。[40] 一方、生け捕られた伊東にとって、赤松に情けある扱い方を受けたことが、逆に「恩」として意識されたのである。そのため、彼は北条武家に与する心を変え（＝変心）、官軍に加勢したのだ。

もう一例、安部野の合戦に敗れ、助けられた敵兵たちが変心する場面の記述。

甲斐なき命を楠に助けられて（中略）楠、情けある者なりければ、小袖を脱ぎ替へさせて身を暖め、薬を与へて疵を療治せしむ。四、五日皆労りて、馬を引き、物具を失ひたる人には、具足を着せ、色代してぞ送りける。されば、敵ながらもその情けを感じける人は、今日より後、心を通ぜん事を思ひ、その恩を報ぜんとする人は、やがてかの手に属して後、四条縄手の合戦に討死しけるとぞ聞こえし。[41]

「甲斐なき命」を楠木正行に助けられた武士たちは、服を着替えて体を暖め、薬を与えられて傷をいやし、馬や武具も与えられ、正行から極めて細やかな扱いを受ける。もともと敵であった正行からこのような情けをかけられたことで、武士たちは逆に正行に心を寄せ、さらには、その「恩」に報ぜんため討死したと記述されている。

以上二例は、共に武士の「変心」を語る場面である。もとの「主」からすれば憎むべき離反行為であるにもかかわらず、『太平記』は、かれらの行動を決して批判的に描いていない。「変心」そのものへの価値判断よりも、どのようにして武士が「恩」に報じたかに、作者の主たる視線が注がれたと見ることができる。

もちろん、『太平記』が厳しく批判する武士の「変心」行為もある。鎌倉幕府の滅亡に際し、「故相模入道重恩を与へたりし侍」五大院右衛門宗繁は、北条高時の嫡子邦時を預けられる。当初、邦時の身柄を守ると承諾した宗繁は、後に保身のために、託された邦時を敵の手に渡す。それ故、自分の甥でもあり、主でもある邦時が殺された。故相模入道から「重恩」を受けた宗繁の「変心」行為に対して、『太平記』は、

昔、程嬰がわが子を殺して、幼稚の主の命に替へ、予譲が己が貌を変じて、旧君の恩を報ぜし、それまでこそなからめ、年来の主を敵に討たせて、欲に義を忘れたる五大院右衛門が心の中こそ、希有なれ、不当なれと、見る人ごとに爪弾きをして、悪まぬ者なかりしかば、義貞、げにもと聞き給ひて、「これをも誅すべし」と……[42]

と、程嬰と予譲の主に対する「報恩」の話を引きながら、宗繁に厳

しい批判の言を加える。この後、世の非難が殺到し、一飯を与える人もいない中で、宗繁は飢え死にすることとなる。宗繁の悲惨な結末が示され、「重恩」を蒙っていたにもかかわらず、「変心」して保身的な背信行為に走った武士の姿が厳しく批判されるのである。ここでも「恩」が重要なキーワードであることが見てとれるであろう。「変心」が非難される場合も、それが問われない場合も、ともにその評価の分岐点は「恩」の意識の有無にあったのである。以上から分かるように、「討死」「自害」「変心」といった武士の生死と直接関わる場面において、『太平記』では「恩」がきわめて重要なキーワードの一つとして登場している。

人見四郎と金沢貞将の討死や塩飽忠頼の自害の場面で語られる「武恩」「一日の恩」「御恩」は、いずれも北条幕府（北条執権高時）との主従関係における「恩」の表現であった。一方、北条仲時の自害に見られる「芳恩」は、主従関係より、軍勢の仲間同士（＝同輩）の関係[43]において語られる「恩」の表現であった。さらに、伊東大和次郎、安部野の合戦で助けられた武士たちが「変心」する場面では、敵との関係において「恩」が語られる。また、宗繁が「変心」する場面で語られる「重恩」は、武士の主従関係の場面において、あるべき行動規範をとらなかった武士を批判する際に特別に選ばれた「恩」の表現であった。生き死にの具体相の異なりを超えて、動機としての「恩」が重視されたことが、指摘できるであろう。

五　おわりに

「恩」（報恩）の考えは、普遍的な社会意識として、中世の二大軍記物語『平家物語』『太平記』の背景に存していた。しかし、より詳細に両物語の「恩」の様相に立ち入ってみると、そこには明らかに大きな差が認められる。『平家物語』中の「恩」は、その多くが教訓的文脈の中で語られており、物語中、「恩」と関わる表現が多出しても、実際の行動を以て「恩」に報いる（＝報恩する）武士の姿はほとんど描かれない。

それとは対照的に、『太平記』においては、武士の生き死にに密接した戦闘場面[44]において、主従関係に限らず、同輩関係や敵関係においても、「恩」が武士のとる行動に影響を及ぼす重要な要素、生きた概念として強調されるに到っている[45]。「恩」を強く意識し、受けた「恩」に自らの生命をかけて報いる武士の姿が数多く描き出されているのである。

もっぱら「忠」で語られてきた楠木正成・正行父子ら名だたる武士以外に、人見四郎、金沢貞将、北条仲時、塩飽忠頼ら、これまであまり議論されてこなかった武士たちの生き死にの場面において、「報恩[44]」する武士の姿が、中世日本における武士像の一つの原型として、『太平記』には表出されている。その姿は実に多様で生き生

きと描き出されているのである。

以上、「恩」そのものの語られ方に着目して、『太平記』に描き出された武士像の一端を明らかにしてきた。従来、中世武士社会における「恩」の思想は、多くの場合御恩と奉公の主従関係の枠組みで捉えられてきた。本稿で考察した武士たちの中でも、主従関係において、主君からの「恩」を強く意識し、それに答えるために死んでいった武士もいる。しかし同時に、主従関係とは離れた場面で、一筋に「報恩」のために死ぬ武士の姿も描き出されていることに、私たちは注目すべきだろう。「名」を重んじる姿を武士のあるべき姿として論じる従来の議論に加えて、戦場での生き死にの場面に顕著に現れる、人々の共感を呼び起こすもう一つの重要な要素「恩」を、中世の物語に語られた武士のあるべき姿として、確認しておくべきだろう。

註

（1）これについては、早くから黒田俊雄「太平記の人間形象」（『文学』二二巻一一号、一九五四年一一月）による指摘がある。また、永積安明「太平記」（岩波書店、一九八四年）、桜井好朗「南北朝の動乱と『太平記』」（『国文学　解釈と鑑賞』五六巻八号、一九九一年八月、一八―二六頁）、佐藤和彦『太平記の世界　列島の内乱史』（吉川弘文館、二〇一五年、初出は新人物往来社、一九九〇年）や網野善彦「楠木正成の実像」（佐藤進一ほか編『日本中世史を見直す』悠思社、一九九四年所収）なども、「悪党」としての正成、または「悪党的」な正成の行為について述べる。

（2）「歴史とは、事実として与えられるものではなく、過去のできごとをいかに物語るかという語りの問題だということだ」（小森陽一ほか編『岩波講座　文学9　フィクションか歴史か』岩波書店、二〇〇二年、一頁）、と兵藤裕己も指摘するように、「言葉」による「語り」の問題が、「歴史」と深く関わっている。本稿も、こうした議論にも啓発されつつ考察を進めていく。すなわち、武士に関わる歴史的「事実」を探ろうとする立場ではなく、また「武士の本当の精神」なるものを主張するものでもなく、武士が「物語」の中でいかに語られ、その語られ方が当時の武士像形成にどうつながっているかという点に注意を払って、描き出された武士像について考えることとする。

（3）「情」は、『平家物語』において武士を語る場面の中で、必ずしも特別な言葉としては出現しないが、時として人々の共感を呼び、涙を誘う場面において登場する（後掲拙稿「『平家物語』における武士の「情」について」を参照のこと）。なお、「情」が武士を語る重要なキーワードとして登場するのは、特に近世においてである。

（4）拙稿（刊行順）「『平家物語』における武士の「情」について」（『広島大学日本語教育研究』第二三号、二〇一三年、四一―四八頁）、同「『平家物語』における武士の「孝」と「忠」」（『広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部（文化教育開発関連領域）』第六二号、二〇一三年、三九六―四〇四頁）、同「軍記物語に描かれた武士像―『平家物語』と『太平記』における―」（『広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部（文化教育開発関連領域）』第六三号、二〇一四年、三二八―三三六頁）、同「『平家物語』における武士の「名」について」（『広島大学日本語教育研究』第二五号、二〇一五年、八三―九〇頁）、を参照されたい。

（5）本稿では、思想史的に武士像を見出す方法をとり、物語の武士関連記述の形成の原態（本源的なところ）を問題にするものではない。そのため、『太平記』の本文は、もともとの中世の姿を伝えると考えられる写本、西源院本を底本とした、兵藤裕己校註『太平記』（岩波文庫、全六冊、現在、第五冊まで刊行済）によることとし、同時に、流布本系の一本、慶長八年刊記古活字本を底本とした『新潮日本古典集成』（新潮社）所収の山下宏明校註・訳『太平記』（一～五）をも参照した。西

源院本が、古本系（西源院本、玄玖本、神田本など）の中でも、相対的（総体的）に『太平記』の古形・古態を保持し、南北朝・室町期の『太平記』を代表しうるテクストであることについては、兵藤裕己『太平記』（四）岩波文庫、二〇一五年、「解説4」を参照されたい。

なお、後文で引用する『平家物語』の本文については、その行き着いた一つの形態として後世にも大きな影響力を持つ覚一本をとりあげ、同系統の一本、現在翻刻、活字化されているテクストのうち、高野辰之旧蔵本（高野本、覚一別本）（一三七一年）を底本とした『新編日本古典文学全集』（小学館、一九九四年）所収の市古貞次校註・訳『平家物語』①／②）を使用することとする。

（6）たとえば、近世における「語り」による『太平記』の受容のありかたについては、若尾政希『「太平記読み」の時代　近世政治思想史の構想』（平凡社、一九九九年）による重要な問題提起がある。

（7）『太平記』については膨大な量の先行研究があるが、近年の『太平記』研究の整理については、兵藤裕己「物語としての政治史―『太平記』を中心に―」（『日本思想史講座　2　中世』ぺりかん社、二〇一二年）、内田啓一「『太平記』」（『岩波講座　日本の思想　第二巻　場と器　思想の記録と伝達』（岩波書店、二〇一三年））が有益である。

（8）たとえば、近年、『平家物語』と『太平記』の印象の相違の解明を、両作品を成立させる「ことば」の違いに求め、「悪行」と「ゆゆし」という二つのことばから、両作品の文学性の相違を模索する池田敬子の問題提起がある（「『平家物語』と『太平記』のことば」『国語と国文学』八五巻一一号、二〇〇八年一一月、三五―四五頁）。

（9）特に出る頻度の高い「恩」の表現を順にあげると、「恩」一字のほかに「恩賞」「御恩」「重恩」「武恩」「朝恩」「厚恩」「芳恩」「恩顧」などがある。また、多くはないが、「君恩」「天恩」「恩寵」「恩義」「恩波」「恩幸」「恩沢」「恩裁」「恩顔」「恩賜」などの表現も『太平記』中には見られる。

（10）加美宏「政治・軍学の書として読まれた『太平記』」（『国文学　解釈と鑑賞』五六巻八号、一九九一年八月、一一八―一二二頁）等、参照。加美宏が指摘するように、政治・軍略の書として受容・研究する戦国武家の潮流を、さらに押し進めて、専らその面から『太平記』に論評・補説を加えた著作のなかに、『太平記評判秘伝理尽鈔』といった評判書がある。この評判書の講釈及び講釈師、いわゆる「太平記読み」が、近世の政治思想にどのような役割を果たしたかについては、若尾前掲書（注（6））の中に詳しく論じられている。それによれば、特に楠木正成は、「太平記読み」によって「明君」／「仁君」として造型され、天皇の「忠臣」を問題とする『太平記』の正成とは異なる受容の一面を見せ、近世の武士層を越えて、思想家や民衆にまで大きな影響力を与えたとされる。

（11）森茂暁「『太平記』と南北朝の動乱」（『中世文学』五三号、二〇〇八年、二八―三六頁）。

（12）佐藤、注（1）所掲書『太平記の世界　列島の内乱史』、その他、兵藤裕己「婆沙羅と悪党―小島法師をめぐって」（『国文学　解釈と教材の研究』三六巻二号、一九九一年二月、五一―五七頁）、児玉正幸「『太平記』に見える、中世武門の倫理―鎌倉御家人と南北朝動乱期のバサラ武士の倫理観の違い―」（『鹿屋体育大学　学術研究紀要』七、一九九二年、一六五―一七六頁）、安田次郎『走る悪党、蜂起する土民』（『全集　日本の歴史　第七巻』小学館、二〇〇八年）等、参照。

（13）相良亨『武士道』（講談社学術文庫版、二〇一〇年、初出は一九六八年）、小澤富夫『武士行動の美学』（玉川大学出版社、一九九四年）、菅野覚明『武士道の逆襲』（講談社現代新書、二〇〇四年）、池上英子著・森本醇訳『名誉と順応　サムライ精神の歴史社会学』（ＮＴＴ出版、二〇〇〇年）等。

（14）笠谷和比古『武士道　侍社会の文化と倫理』ＮＴＴ出版、二〇一四年。

（15）桜井庄太郎『恩と義理―社会学的研究』アサヒ社、一九六一年、四二頁。

（16）桜井前掲書、五四―七〇頁、参照。

（17）桜井前掲書、一一三―一二二頁、参照。

（18）『世界大百科事典4』平凡社、二〇一一年（初版は一九八八年）、四三二頁。

（19）石毛忠ほか編『日本思想史辞典』出川出版社、二〇〇九年、三二四頁、参照。

（20）国史大辞典編集委員会『国史大辞典』第十二巻、吉川弘文館、一九九一年、五七三頁「奉公」の項、参照。

(21) 同上『国史大辞典』第十二巻、五七三頁「奉公」の項、及び同『国史大辞典』第七巻、三七二―三七四頁「主従制」の項、参照。

(22) 用例としては、公卿である藤原成親について、「父の卿は中納言までこそいたられしか、其末子にて、位正二位官大納言にあがり、大国あまた給はッて、子息所従、朝恩にほこれり」(巻第一、鹿谷)、社僧の湛増について、「湛増は、平家の御恩を天山とかうむッたれば、いかでか背き奉るべき」(巻第四、源氏揃)、女人の葵前について、「『君が一日の恩のために、妾が百年の身をあやまつ』とも、かやうの事をや申すべき」(巻第六、葵前)とある。

(23) 前掲『平家物語』①、一三五―一三六頁。

(24) 前掲『平家物語』①、一三七―一三八頁。

(25) 「教訓状」から、「烽火之沙汰」まで続いた重盛の諫言から、理想的な「忠臣孝子」像としての重盛像がうかがわれることについては、拙稿「『太平記』に描き出された武士像―「忠」と「孝」を中心に―」(『広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部(文化教育開発関連領域)』第六四号、二〇一五年、二八三―二九二頁)、を参照されたい。

(26) その他、平清盛が平家を亡ぼそうとする藤原成親を罵る時に語った言葉、「恩を知るを人とはいふぞ。恩を知らぬをば畜生とこそいへ」(巻第一、「小教訓」、一一六頁)や、平氏が都落ちしていく際、一族・郎等の団結をはかるために語った宗盛のことば、「或は近親のよしみ他に異なるもあり、或は重代芳恩是ふかきもあり。家門繁昌の古は、恩波によッて私をかへりみき。今なんぞ芳恩をむくひざらんや」(巻第七、「福原落」、九一頁)などからも、これらは、語る側が相手に向かって使用し、「恩を知ること」と「恩に報いること」の重要性を説き、あるいは相手の間違いを指摘し、あるいは相手を自分側に引き付け納得させるための、いずれも「教訓的な意味」を持つ文脈中の「恩」の表現であることが分かる。

(27) 『十訓抄』(浅見和彦校註・訳、小学館、一九九七年)第一は、「鯉の恩返し」(原話は『三秦記』)、「蛇の恩返し」(同『捜神記』)、「黄雀と白亀の恩返し」(同『捜神記』『蒙求』『晋書・孔愉伝』)など、中国古典から動物の報恩譚を引用し、さらに本国日本の蜂や天狗の報恩譚、古インドの「天魔の恩返し」など、人や動物に限らず、時に奇妙な「もの」の報恩話を用いて語ったのは、第一の標題にもある「人に恵を施すべき事」と相まって、教訓的な意味の強い「恩」(報恩)が説話として語られているのである。

(28) 前掲『平家物語』②、三一九頁。

(29) 兵藤裕己校註『太平記』(二)、岩波文庫、二〇一四年、「解説2」を参照。同様の文章は兵藤裕己『王権と物語』(岩波書店、二〇一〇年、初出は一九八二年)、一五〇頁、にも見られる。

(30) 前掲『太平記』(一)、三〇三頁。

(31) 兵藤の注釈に従い、ここでの「武恩」とは「幕府から受けた」恩を指すものと判断したい。

(32) 前掲『太平記』(一)、三一一頁。

(33) 前掲『太平記』(二)、一三七―一三八頁。

(34) 前掲『太平記』(二)、一六一頁。

(35) 同上。

(36) 前掲『太平記』(二)、八八頁。

(37) 前掲『太平記』(二)、一四一頁。

(38) 前掲『平家物語』②、三〇六頁に、維盛が唱える偈文に「流転三界中、恩愛不能断、棄恩入無為、真実報恩者」とある。一方、『太平記』においても、公卿の万里小路中納言藤　房卿が出家する場面、この「悲華経」等にみえる偈文が引用される。しかし『太平記』の武士について見ると、「出家こそ真実の報恩」という仏教的な考え方で語られた場面は見当たらない。ここからも、『平家物語』の武士と『太平記』の武士の「報恩」に対する異なる見方がうかがえる。

(39) 前掲『太平記』(一)、三五〇頁。

(40) 山下宏明校註・訳『太平記』(一)、三一四頁の、山下の注を参照。

(41) 前掲『太平記』(四)、二〇七―二〇八頁。

(42) 前掲『太平記』(二)、一七〇頁。

(43) この場面における武士たちの自害が、主君への忠誠倫理を示すものだと、池上は前掲書(注(13))『名誉と順応　サムライ精神の歴史社会学』の中で述べている。すなわち、池上は北条仲時と軍勢の武士たちの関

係を主従関係だと捉えている。しかし、もう一度この場面における武士たちの自害に至る記述の細部に立ち入ってみると、味方の軍勢に「報恩」するため自害した仲時の様子を目撃した、軍勢の中の糟屋三郎宗秋は涙を流し、「宗秋こそ先づ自害仕つて、冥途の御前をも仕らんと存じつるに、先立たせ給ひぬるこそ口惜しけれ。今生にては、命を際の御先途を見果てまゐらせつ候はめ、また冥途なればとて、見放し奉るべきにあらず。暫く御待ち候ふべし。死出の山の御供申し候はん」と言い、仲時の後を追って自害する。さらに、武士総勢四百三十二名が続いて自害する結末に至る。北条仲時の、仲間への「報恩」としての自害に続き、その一門の武士たちも彼の後を追って壮絶な自害をしていくこの場面の記述からは、上下的な主従関係というよりも、むしろ仲間同士の固い結合の中での行動原理が見られるであろう、と論者は考えている。

(44) ところで、『平家物語』にも、合戦と武士の「生き死に」を描く場面がある。本稿ではそれについて言及しないが、そこでは、「名」や「情」で語られる武士の姿が表出されているのである（前掲拙稿「『平家物語』における武士の「情」について」、同「『平家物語』における武士の「名」について」、参照）。

(45) 本稿で考察したように、両作品における「恩」の語られ方の相違は、その語られた場面の違いに由来する部分が大きいだろう。その理由としては、二つの物語の背景にある宗教思想の相違、作品が扱う時代の相違、さらにテクスト編纂の意図の相違などが指摘できようが、ここでは一つだけ具体例を挙げておこう。『平家物語』に一貫しているのは、無常観・因果応報・欣求浄土などの仏教思想だとされている。ところが、注（38）で触れたように、『平家物語』に見られた武士の「出家こそ真実の報恩」とする仏教的な考え方は、『太平記』の武士においては否定されている。

(46) 一般に武士の主従関係においては、従者の主への「忠」（忠誠、忠義）がよく取り上げられる。そしてその「忠」の窮極のかたちが、主君のために身命を惜しまないこととされる。本稿で考察した人見四郎・金沢貞将・塩飽忠頼らの北条執権との主従関係における「報恩」行為は、後世（特に近世以降）の武士論から言えば、主への「忠」へとつなげて説明することもできる。しかし同時に、『太平記』においては、武士の「報恩」行為は、武士の上下関係において以外に、仲間同士や敵との関係においても語られており、それらの武士の「報恩」行為＝討死、自害などは、そのまま「忠」につながるものとしては説明しきれないだろう。

（う・くん／広島大学大学院教育学研究科　文化教育開発専攻　博士課程後期）